本《子ども》文化＋風俗

ビランジ

CONTENTS

EXAMINATION

〈連載〉戦後劇場アニメ公開史 ⑨
大作「ピーター・パン」「やぶにらみの暴君」他 …… 4 渡辺 泰
アニメ『ゼラフォーン』が奏でる共生社会の旋律 …… 29 木村 晶彦

〈連載〉マンガ表現試論 ③
「ジャンプ」から「セカイ」系へ …… 56 小山 昌宏
『B・Jリポート2004』 ―B・Jの環境問題 …… 75 湯舟 燎

〈連載〉変容するマンガたち ③
宮尾しげをの絵物語「漫画太郎」の遍歴 …… 93 竹内オサム

MEMORY

知られざる《漫画の殿堂》芳文社からの実況報告 …… 112 花澤 正昭

〈連載〉児童雑誌編集者として・思いだすことども ⑥
―もう四〇年も経ったんだなあ …… 128 丸山 昭

〈連載〉聞き書き「街頭紙芝居」 ⑤
鈴木常勝氏に聞く―実践と研究の両面から街頭紙芝居に迫る …… 142 畑中 圭一

DISCUSSION

夏目房之介『マンガ学への挑戦』への疑問 …… 160 竹内オサム
「『マンガ学への挑戦』への疑問」について …… 165 夏目房之介

OBSERVATION

独眼独歩（1998年1月の日記） …… 168 横山まさみち（構成・高橋孝三郎）

〈連載〉雑誌「少年」のライバルたち ④
嗚呼「少年画報」、さようなら号への軌跡 …… 178 F・M・ロッカー

ESSAY REVIEW

インドおたく七変化 ―流水りんこ― …… 156 吉川真美子
風にふかれて児童文化論 …… 52 川勝 泰介

■ **INFORMATION**

・執筆者紹介 214 ・近隣大学卒論リスト 206 ・オサムの本 155
・バックナンバー紹介 210 ・なんてユータンが教科書に 209
・小学館クリエイティブの本 51 ・編集後記 215

⑮号

BIRANZI
2005・4・3
OSAMU TAKEUTI

表紙装丁・おさたけし

〈連載〉変容するマンガたち③

宮尾しげを『漫画太郎』の遍歴

竹内オサム

◆絵物語「漫画太郎」の位置

いきなりだが、「漫画太郎」をご存じだろうか。漫画太郎――『週刊少年ジャンプ』を中心に活躍するマンガ家、漫☆画太郎（漫F画太郎）ではない。漫画ショーで知られたマンガ太郎のことでもない。大正末に描かれた絵物語作品のタイトルである。多くの人にとっては、おそらく初めて聞く題名ではないかと思う。あるいは、作者である「宮尾しげを」の名さえ、耳にしたことがないかもしれない。絵物語という表現形式自体、現代の読者にはなじみのないジャンルなので、なおのことそうした印象をもつのではないだろうか。

大衆向けの作品というものは、短命であるという宿命をもつ。連載当時熱狂的に子どもたちに受け入れられた作品であっても、ものの十年もすると顧みられないことが多い。ましてや、今日のマンガの形式とは大きく異なる絵物語であり、また大正期末の作品ともなれば、なおのことそうだろう。

しかし、マンガ史の関心からみれば、宮尾しげをおよびその絵物語は無視することができない。吹き出しを用いたマンガが流行する以前に、日本には絵物語という独自の視覚的な表現が、メディアを通じて子どもたちに楽しまれていた。それも同じ〈絵物語〉という呼称ながら、戦後大ブームとなった山川惣治や小松崎茂らの絵物語とはまた

異なる形式の物語が大流行していたのである。

過去との結びつきも強い。日本のマンガの発展の歴史から言うと、江戸期の草双紙や明治の絵ばなしとのつながりにおいて、コマを使用したマンガよりも絵物語の方によりいっそう近い形を確認することができる。そうした意味で大正末から昭和初期にかけての絵物語の流行を、マンガ史の記述からはずすことはできない。また、山川惣治らによる戦後の絵物語の流行も含めて、吹き出しを用いたマンガと、コマの外に文字を添える絵物語は、モザイクのようにマンガ史に組みあわさっており、そのせめぎ合いや相互交流のありさまは、マンガの歴史を考える上できわめて重要なできごとだったはずだと、ぼくなどは理解するのだ。

純日本風の顔つきをした絵物語の流行、その中心にいた人物、それが宮尾しげをなのである。

宮尾しげをは、一九〇二（明治三五）年浅草に生まれた。岡本一平にあこがれて一七歳で弟子入りし、一九二二（大正11）年に東京毎夕新聞に入社している。同紙にしばらく風俗漫画や政界人物の点描などを手がけたが、子ども向けの絵物語の連載も始める。ここでとりあげる「漫画太郎」という作品である。

流行作家となってのち、宮尾の絵物語はさかんに単行本化された。『東京毎夕新聞』連載の「漫画太郎」（一九二三年）は毎夕社出版部より、『団子串助漫遊記』（一九二五年）は大日本雄弁会講談社から出版されている。そのほか、『一休さアんと珍助』（一九二六　草文社）、『かるとびかるすけ』（一九二七　大日本雄弁会講談社）、『あっぱれ無茶修行』（一九三二　婦女界社）、『孫悟空』（一九三九　大日本雄弁会講談社）など多数にのぼる。子ども向けマンガの単行本の出版がいまだ珍しかった時期にである。

当時を生きた少年少女なら、宮尾しげをの絵物語というと、『団子串助漫遊記』がまず頭に思い浮かぶことだろう。大手の大日本雄弁会講談社から出たことも手伝い、広く読まれた単行本であった。しかし、マンガの描き変えのあとをたどるこの連載では、宮尾しげをの作品から、それに先立つ「漫画太郎」を取り上げていきたい。

なぜなら、「漫画太郎」は宮尾の実質的なデビュー作であり、関東大震災によって単行本が『団子串助』ほど出回らなかったものの、宮尾しげを

という絵物語作家の基本的な物語作りの方法があからさまに示されているからだ。また、せいぜい8〜10コマというこれまでの短編が、何十コマに及ぶ作品に長編化した、その先駆的な場所に位置する作品であるためである。新聞連載という制約をもちながらも長編マンガというスタイルの変革が、大正末期に実践されていた。だからこそ、あらためて「漫画太郎」という作品に注目したいのである。

作者にとっても思い入れのある作品だったのだろう。描き変えを何度か行っている、その点にこだわりたい。

◆初出と作品の概要

実は、「漫画太郎」については一度別の本でふれたことがある。手塚治虫以前、戦前戦中の子どもマンガの足どりをたどった『子どもマンガの巨人たち』（一九九五　三一書房）という単行本のなかで詳しく論じた。その本で指摘したポイントはふたつ。まず連載期間が不明であったのを、初出紙にあたって確定したこと。つまり、第1回目が、大正一一年一〇月一六日、最終回が同一二年四月六日、週二回毎回10コマ、全45回、総計四五〇コマの連載であった点をあきらかにした。

また、紙面には子どもからの投書が欄外に掲載されている。その分析を通じて、この絵物語が子どもの要望に応じてストーリーを発展変化させていったあり様をはっきりとさせた。いわば読者の反応をみつつ、それに寄り添い作りあげた絵物語であったと言えようか。読者参加型の創作方式を用いた点を指摘しておいたのである。この点も今日ではあたりまえのことかもしれないが、大正末にこうした物語作りをしていた事実は、異例のことではなかったかと思う。

「漫画太郎」に作者も大きなこだわりをもっていたようだ。何度か同作品を描き変えている。『ビランジ』での連載「変容するマンガたち」というテーマのもとに、この小論では、その後の描き変えのあとをたどってみたい。そうした作業を通じて、宮尾の創作意識の変化と作品に反映された当時の時代相についても考えてみたい。

とはいっても、やはりこの作品についての多少の知識が必要となるだろう。そこで、『子どもマンガの巨人たち』に書いた宮尾しげを論から、ス

トーリーの概要を紹介しておく。

粗筋は次のとうりである。

物語は、忍術の本を読んでいた太郎が、羽黒山の天狗にさらわれるシーンからはじまっている。天狗に忍術を教えこまれ免許皆伝の腕前となった太郎は、武者修行の旅へ。途中で娘をさらおうとした山賊を、二枚岩でサンドイッチにして吹き飛ばす。日照りで苦しむ村人には、三日三晩ヘソから水を吹き出してプレゼント。街なかへ逃げ出した虎は、ふたつ折りにして鼻をかみ、海の暴れものシャチと相撲をとっては投げ飛ばし、名古屋城の金のシャチホコにしてしまう。何とも豪快な展開をもつ。

腹痛をおこした武士の体内に入りこむというSF的芸当もやってのけるし、はてはヨーロッパへ奇術忍術比べの旅へと出かける。知恵と勇気と怪力をあわせ持ったスーパーヒーローが空間を自在にゆき来する、徹底的に現実をデフォルメ化した物語であった。

文章は歯切れのよい講談調、それに塵隠灰蔵、鼻飛歯助などの人物のネーミングは、明らかに当時はやった立川文庫のパロディだし、目玉の松ちゃんやチャップリンなど映画の人気もとりいれ、さらには落語や小咄の教養も吸収した、いわば大衆文化のおもしろさの系譜を、宮尾の感性でビジュアルに表現してみせた空想世界であった。

大正末から、アメリカン・コミック・スタイルの「のらくろ」が始まる一九三一（昭和六）年まで、子どもマンガ界は宮尾絵物語一色という時代がつづく。先に単行本をいくつか挙げたが、もともと雑誌新聞の連載も多く、「鼻尾凸助諸国漫遊記」（一九二三～二五『少年倶楽部』）、「孫悟空」（一九二五～二六　同）、「一寸太郎」（一九二六『幼年倶楽部』）、「猿飛佐助」（一九二七『少女倶楽部』）、「〇助漫遊記」（一九三一『毎日新聞』）などの絵物語を連載している。

宮尾は、マンガ家としてスタートした頃をふりかえり、「どうせ先輩並を主材として漫画を描いたところで、とても追いつくわけにはいかぬ」と考え、「先輩があまり手を染めていないものと言うと、子供漫画の世界である事を見つけ」たという（宮尾しげを「団子串助の誕生」『児童文芸』一九六四年三月）。二〇歳の時である。彼は思いきった企画で、自己のマンガ生命を切りひらこうとした。長編性というスタイルの変革と子どもマンガという新ジャンルの確立とが、その具体的展開であった。「漫画太郎」という作品は、そのスタート地点に位置づく。

図1　①「漫画太郎」『東京毎夕新聞』T11・10・16、第1回

「毎夕太郎」（「東京毎夕新聞」大11・10・16　第1回より）

◆描き変えのあと

大正末期に、子どもマンガではこれまになかった長編の絵物語として人気を集めた「漫画太郎」。子どもの欲求を即座にはねかえして奇抜な物語世界を形づくった新聞連載の絵物語。

このように特異な位置にある「漫画太郎」は、以降どのように描き変えが行われていったのだろうか。

「漫画太郎」は『東京毎夕新聞』の一九二二（大正11）年一〇月一六日から一九二三（大正12）年四月六日の間に連載された、その点はすでにふれた。日曜と水曜の週二回、毎回10コマずつ、総45回の連載である。おもしろいことに1回から10回までは「漫画太郎」ではなく、「忍術修行・毎夕太郎」というタイトルになっている。途中から主人公

図2 ②『漫画太郎』T12 毎夕社出版部▶

▼図3 ③『忍術天地丸』1928 磯部甲陽堂

の名も、連載のタイトルも変えたわけだ（以下で混乱をさけるため、特別な場合を除き「漫画太郎」と記す）。

一九二三（大正12）年五月には同紙社より単行本化。しかし、出版後の九月に関東大震災にみまわれたため、何版か版を重ねたらしいが、広くは出回らなかったらしい。

単行本には新聞に初出のもの四五〇コマに近い形で再録されている。添えられた言葉はほぼそのままに、全面的にリライトされているのだ。

その後、「漫画太郎」は奇妙な運命をたどる。バラバラにされて再編が続くのだ。新聞連載の1回から4回目を『忍術天地丸』（一九二八　磯部甲陽堂）に、6、7、9、10、13回を『天空天之助』（一九二八年四月　『少年倶楽部』）に、34～45回を「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」（一九二八　『現代漫画大観4　子供漫画』所収　中央美術社）というふうに、いくつかのエピソードに分けて再収録されていく。さらに、一九三三（昭和八）年には、『漫画太郎』なるタイトルで、

やはり34～45回分が収録されている。戦後になると宮尾しげをの再評価を期して、かのう書房より『しげを漫画図鑑Ⅰ』（一九八四年四月　かのう書房）に、一番最初の単行本が復刻された。

以上の出版の推移を、箇条書きにまとめておくと次のようになるだろう（以下の番号は竹内が付けた仮のもの）。

①「漫画太郎」（1～10回は「忍術修行・毎夕太郎」の表題）
一九二二年一〇月一六日～一九二三年四月六日（全45回）『東京毎夕新聞』

②『漫画太郎』（単行本）
一九二三年五月　毎夕社出版部

③『忍術天地丸』（単行本）
一九二八年　磯部甲陽堂

④「天空天之助」
一九二八年四月　『少年倶楽部』

⑤「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」
一九二八年六月　『現代漫画大観4　子供漫画』所収　中央美術社

⑥『漫画太郎』（単行本）
一九三三年一月　春陽堂

⑦「漫画太郎」『しげを漫画図鑑Ⅰ』所収
一九八四年四月　かのう書房

「漫画太郎」はこのように何度も描き直しを経た作品だ。作者としてもかなりの愛着があったはず。また多忙をきわめつぎつぎと絵物語を量産していった作者にとって、発想の豊かさが温存された作品として心にずっと残っていたのではないかとも思う。

ともあれこうした何度もの描き変えや再編のあとを目の前にすると、読者にとっては読み捨て文化のひとつにすぎない作品であっても、描き手である作家の背後では、別のドラマがうごめいていたという事実を切実に感じさせる。

さて、右のような変化のうち比較すべきは、①→②→③→④という流れになるだろう。初出と単行本、およびその一部を他の作品にどう組み込んでいったかという推移のありさまだ。②の単行本の実物は筆者未見なので、⑦の複刻版を②に代えて比較を行なってみたい思う。

⑤⑥については、最後にまとめてふれることにしよう。

◆「漫画太郎」の夢のゆくえ

①②③④相互の関連を記しておく。①は初出、45回、四五〇コマの絵物語である。②はその単行本化。言葉にさほどの変化はないが絵そのものは構図やキャラクターを変えずに描き直しを行っている。③と④は、①の一部を描き直して使用。しかし、再録の部分のみで話が完結しているわけではなく、他の話にエピソードが組み込まれた形になっている点が注意される。

作品名	ページ数	コマ総数
①漫画太郎　1922	45回	450
②漫画太郎　1923	113 p	452
⑤忍曽太郎助1928	48 p	95
⑥漫画太郎　1933	48 p	95

表1 作品のページ数とコマ数

まず①の新聞連載の作品の詳細については、拙著『子どもマンガの巨人たち』（一九九五　三一書房）に譲りたい。ただ、掲載紙『東京毎夕新聞』が株相場の情報を載せた新聞で、読者も東京下町に集中していたという点だけは、ここに記しておかねばならない。なぜなら、子どもマンガでは初となる長編ものが、マンガや絵物語をもっぱらにした大手の新聞雑誌から生まれたのではないという点は、マンガ史の発展を見るときに重要な意味をもつと思うからだ。

さて、ふたつめの単行本②『漫画太郎』（一九二三）だが、これはいま述べたように、①の新聞連載の忠実な描き直しになっている。おおむね文章に変化はない。絵の構図もほとんど変わらない。今日ではほとんど目にすることができない単行本だが、幸い⑦の『しげを漫画図鑑Ⅰ』（一九八四）に全編が復刻されたので、今日では容易に当時のものを確認することができる。

細かいことを言うようだが、②の単行本の出だしは、初出①と異なって文章に奇妙な語句が加えられている。現代風俗を取り込んでいるのである。〈図1〉〈図2〉を見てほしい。初出の新聞①では、1コマ目に「毎夕太郎が或日の夕方好きな忍術本を庭の隅の芝生の上で」読んで…と書かれているが、単行本②になると「漫画太郎は或日の夕方野球にも倦きて好きな忍術本を庭の隅の芝生の上で」読んでいると書き直されている。新たに「野球にも倦きて」という言葉が挿入されているのだ。舞台設定は江戸時代である。なのに野球という現代的素材が入り込み、絵にも丁寧にバットとボールが描き加えられているのである。

実はもともと①の新聞連載作品がこの調子なのだ。江戸時代の話であるはずが、武士が車に乗って登場しヘッドライトで太郎を照らしだしたり、海賊が潜水艇に乗って現れ飛行機を利用したりもする。懐中電灯やバット、アルコールランプ、地球儀などの素材も登場、見せ物で儲けた太郎が銀行にお金を預けにいくというのだから、生真面目にうけとれば時代錯誤もはなはだしい。ところがそれが、この絵物語の野放図なおもしろさの要素となっていたのだ。

表現性も優れている。江戸文芸の要素に加え、あい対立するようだが、宮尾は新興のメディアである映画に多大の関心を寄せていた。それが画面をきわめてモダンなものにしたてあげていたのだ。〈図4〉〈図5〉には②の単行本から端的な例として、クローズアップの表現をあげておいた。当時としては異例である。これは、他の作品からの引用だが、瞳に視点対象が映しこまれるという斬新なコマもあって驚かされる（〈図6〉〈図7〉）。瞳の表現については、近々出る『マンガ表現学入門』筑摩書房　に詳しく書いたのでそちらも併せてお読みいただけると嬉しい）。

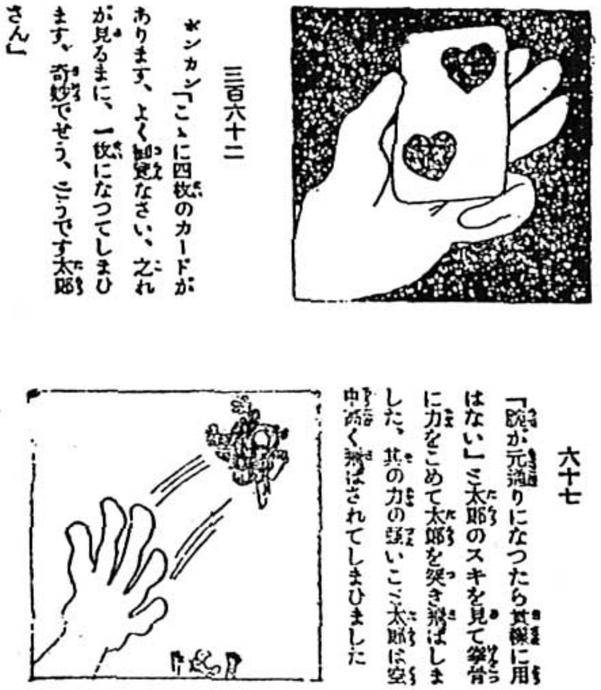

図4、図5　②『漫画太郎』（毎夕社出版部）より

吹き出しのない絵物語、それも簡略な絵柄の絵物語なので、今日の読者にはとっつきにくいはず。しかしじっくり読み進めてみると、なかなかの想像力とユーモアがある。ぼくなどは、もっと宮尾しげをの作品が、とりわけ「漫画太郎」は再評価されてしかるべきだと思うのだが。マンガ研究者を自称する人、なかでもマンガ史を専門とする人には、もう少しこの時代の絵物語の動きに目を向けてもらえないものかと思う。

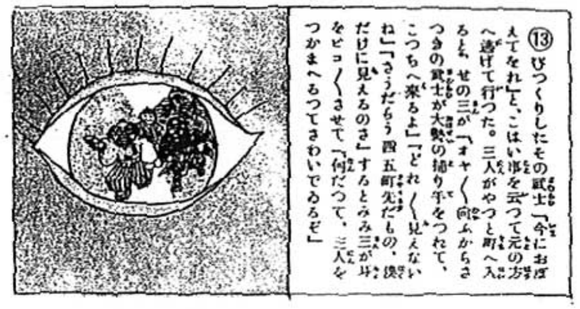

図6『その後の文福茶釜』S2

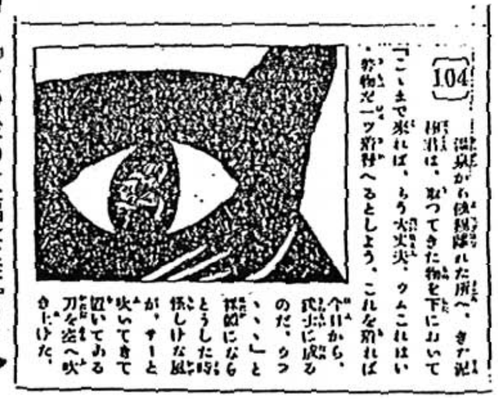

図7「三人三太郎」『少年倶楽部』S6

◆「忍術天地丸」と「天突天之助」

話を書誌事項の方へと戻そう。②の単行本は、すぐに関東大震災が起こったため、あまり本自体は出まわらなかったらしい。いま触れた復刻本⑦では、②の本の再版本が元本にされている（一九二三・六・三発行、初版は同年五月二五日発行とのこと）。いったい何版まで出されたのか、どの程度読まれたのか、気になるところだ。ちなみに当時の『東京毎夕新聞』（一九二三・六・七）には、次のような広告がある。

六月一日に綺麗な箱入りの本となつて現はれた漫画太郎は飛ぶやうな売行でもう一版二版は売切れてしまひました　三版が今日出来ました　御早く御申し込み下さい　全国至る所の有名な書店には売つて居りますが若しございませんければ本社へ直接御申込み下さい

初版の奥付は五月二五日だが六月一日に発売されたとのこと、箱入りであった点などがこの記事から知れるが、それよりも売れ行きのよさの方に目がいく。奥付から判断すると、一週間ほどの間に再版が、さらに数日のうちに3版が出たことになる。相当売れ行きがよかったようだ。関東大震災は九月一日に起こっているから、のち三ケ月足らずのあいだにもっと版を重ねた可能性が高い。

さて、「漫画太郎」は震災のため出版がストップ。そのかわり震災後に同じく『東京毎夕新聞』に連載した「団子串助漫遊記」が大手の大日本雄弁会講談社より出て、同作品が宮尾しげをの代表作として知られていく。そして、最初の長編もの「漫画太郎」は表向き忘れさられたかっこうとなってしまうのだ。

ところが作者宮尾の心中では、鮮明な記憶の作品でありつづけた。一覧に記したように震災後さらにいくつかの作品に転用されていく。一部が『忍術天地丸』（一九二八　磯部甲陽堂）と「天突天之助」（一九二八・四　『少年倶楽部』）に転用されたのはすでにふれたとおり。もともとの『東京毎夕新聞』連載作品を基準にすれば、1〜4回分が「忍術天地丸」に、6、7、9、10、13回分が「天突天之助」に使われているということになる。

確認はできてはいないが、他の資料によると、「忍術天地丸」は「漫画太郎」や「団子串助漫遊記」が載った『東京毎夕新聞』に連載された絵物語であったらしい。展示会目録『新聞漫画の眼―人　政治　社会』（二〇〇三・十一　ニュースパーク）には、同紙一九二八年二月二三日に掲載された「忍術天地丸」の第18回目が紹介されている。とすれば、同年にさっそく磯部甲陽堂から単行本化されたと理解していいだろう。もし『東京毎夕新聞』に連載されたのなら、宮尾は、一九二二年連載の同作品の冒頭を、五、六年後の二八年の同紙の別作品に再度使用していたことになる。むろん読者層のサイクルは変わったことだろうが、読者のなかには「漫画太郎」と同じ出だしだと感じた者がいたかもしれない。

〈図3〉には、単行本の方から「忍術天地丸」の初回を挙げてある。もともとの「漫画太郎」が時代ものでありながら、現代の風俗をも折り込んだシュールな作品であったわけだが、そこに含まれる物語の発想は、「忍術天地丸」にも「天突天之助」にも、また「団子串助漫遊記」にもみごとに受け継がれていく。

①の「漫画太郎」はその後、34〜45回分が形を

変え、⑤「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」というタイトルのもと『現代漫画大観4　子供漫画』（一九二八年六月　中央美術社）に収録された。やはり一九二八年のことである。一九二三年、震災前に連載され単行本化された絵物語が、その五年後の二八年にバラバラにされた形で、他の作品に組み込まれたわけだ。この一九二八年の時点で宮尾は突然何らかの思いにとらわれたのだろうか。

先にふれたように昭和にはいると、単行本『団子串助漫遊記』（一九二五年　大日本雄弁会講談社）が大ヒットして宮尾は時代の寵児となる。岡本一平にならった漫画漫文形式の絵物語は、子どもの指向に合致した物語形式として大歓迎される。やがて宮尾は昭和初期に次々と作品を描き次いで人気作家となっていくのだが、その宮尾にとって、長編第一作目の絵物語「漫画太郎」は、ずっと心にかかるデビュー作であったと理解してよいだろう。

と同時にこうした描き変えのあとは、「漫画太郎」という作品の基本構造をも暗示している。新聞連載の「漫画太郎」をいくつかに分けて再掲載しえたという事実は、もともとの作品が全体として首尾一貫した構成をもっていなかったということを示している。初めは羽黒山の天狗にさらわれ忍術修行、仙台から江戸に出て名をあげる太郎、そののち欧米に奇術師たちと他流試合。この前半と後半部分の飛躍が奇想天外といえば奇想天外なのだが、同時にひとつの作品としてはまとまりがなく違和感を感じさせる。要するに、子どもたちの要望（投書内容）を取り入れ、あとで述べるが自分を取り巻く環境をダイレクトに反映した結果であったと考えられるのだ。

◆宮尾の旅行趣味

この作品の物語構造に、もう少し探りを入れよう。

「漫画太郎」は、いわば諸国漫遊記ものと言える。各地をめぐり歩きながら、さまざまな事件に遭遇する。羽黒山の天狗のもとで修行した太郎は、はじめ日本の各地を旅するが、途中からヨーロッパにまで足をのばす。その点では、きわめてスケールの大きな絵物語であることはまちがいない。

児童文学の研究者石井直人は、児童文学の物語の基本構造を、「成長物語」「遍歴物語」に二分して整理したことがある（「児童文学における〈成長物語〉と〈遍歴物語〉の二つのタイプについて」『日本児童文学学会会報』19　一九八五・三）。時間経過のともに主人公が内面的に成長する物語のタイプと、空間移動によってさまざまな事件展開が訪れるという構成に分けて説明している。石井は述べる。「この〈成長〉と〈遍歴〉の二項対立は、様々なジャンルで成り立っている。小説ではかつてよく対比された、教養小説と大衆小説。児童文学批評では、小説精神と童話精神。…」。

「漫画太郎」の諸国放浪の物語は、石井の言う二大物語のタイプのうち遍歴ものに該当し、であるからこそ、大衆向けの作品になりえたと解釈できる。

ただし、ここには宮尾しげをという絵物語作家個人の趣味も、色濃く影を落としている点も忘れてはいけない。宮尾は映画同様、かなりの旅行好きだったようだ。エッセイ「團子串助と私」（『週刊朝日』　49・4・10）で自己の作品「団子串助漫遊記」にふれ、「この間に盛んに好きな旅行をして、見てきた風物を画の中に取り込んで、他の人と別の味を出そうと苦労した。」「漫画に現れた串助は、私自身でもあることは疑いない。すくなくとも旅の好きなだけでも。」と告白している。ぼくは宮尾しげをの絵物語が、江戸文芸、映画、旅行の三つの素養から成り立っていると思っているのだが、なかでも遍歴ものの形式に直接影響を与えたのは、本人の旅行好きの趣味であったにちがいない。

ちなみに、漫画太郎の遍歴の軌跡は次のようになる。出羽の羽黒山をあとにして、仙台の城下に出て活躍、その後地名は不明だが山中、海辺、海の底とあちこち移動、その超人ぶりが知れわたって千代田城主に招かれる。江戸で人気者となる。が、つづけてまた諸国漫遊の旅に。新聞連載の34回からは、あらたな旅立ちが始まる。地球儀を見ているうちに外国に奇術師たちと対決したくなり、忍術使い（奇術師）トンチンカン師を訪ねて海路アメリカへと旅立つ。奇術師とわたりあいながら、アメリカ（ニューヨーク）をあとにしてイギリス（ロンドン）、つづけてフランス（パリ）、ドイツ（ベルリン）、イタリア（ベニス）、エジプト（カイロ）へ。そこから日本の汽船に乗って江戸に帰り着くというふうに展開するのである。最後

「忍術指南所」の看板をあげ、めでたしめでたしの結末となる。

日本国内では盗賊や化け物との戦い、海外では奇術師たちと一騎討ち、それがこの遍歴物語の基本軸となっていたのだ。

◆大正時代の旅行熱

「漫画太郎」の遍歴的要素には作者の好みとともに、当時の風俗も如実に反映されていた。その点を追加して記しておこう。

宮尾は旅好きだったが、同時に大正期に世間に流行した旅行熱も、こうした空間を移動する物語に、ひとつの憧れや切実感を付け加えていたにちがいない。「外来文化である観光・避暑旅行は、明治末から第一次世界対戦に至る好景気の故もあって、次第に日本人のものとなっていった」（大塚明「文化産業の成立」　南博編『大正文化』所収　一九六五　勁草書房）のである。

以下元号で記すが、明治末四五（大正元）年には東京下関間に初の特急が開通、観覧車が仕立てられていたという。同年には樺太縦貫鉄道も全通。大正二年になると万国遊覧会社と日本観光会社が設立される。旅行社の誕生である。七年には生駒室生寺間にケーブルカーが開設、一方東京も交通、駅舎の整備が始まる。新東京駅が大正三年にオープン、一二年には小田原急行鉄道が設立、一四年には東京環状線の電車が全通、翌月には東京で遊覧バスの営業が開始されている。

こうした交通網や観光事業の整備は、第一次大戦の特需景気に後押しされたものだった。生活をエンジョイする市民階級が勃興し、百貨店がいくつもでき、大衆文化が広がりをみせる。『婦人公論』『主婦之友』などの女性誌、『キング』に代表される大衆誌、『赤い鳥』『金の星』などの児童雑誌も創刊され、また上野や京都で博覧会が盛んに催された。大正四年には「ギンブラ」や「今日は帝劇、明日は三越」なる流行語も生まれたし、六年には東京少女歌劇がオープンしている。彩り豊かな大正文化が華開いたのである。後半は特需の反動としての恐慌がおこり、九年には初のメーデーが上野公園で行われている。不景気の訪れが、共産思想の流入とともに、ファシズムを台頭させるきっかけともなる。

こうした文化生活（文化という言葉もやはり大

正期に生まれた。児童文化なる語も、大正末に姿を見せる）のもと、旅行が庶民の娯楽として支持を得ていくのである。

マンガ家も例外ではない。いやマンガ家こそ、時代の流行を先取りして取材し、それを作品にしたてあげる宿命をもっている。そのため盛んに旅行をした。伝統的な精神修行のための「旅」ではなく、享楽としての「旅行」をである。

「漫画太郎」の執筆時期である一九二二（大正十一）年に近いものでは、前年の二一年の五月に、中央美術協会主催によってマンガ家たちも東海道五十三次を自動車旅行を行っている。参加者は18名、ただし若手の宮尾はそのなかに含まれていない。

こうした状況以上に、「漫画太郎」の遍歴のゆくえに大きな影響を与えたのが、師である岡本一平の洋行であったはずだ。岡本一平は、婦女界社からの派遣で二二（大正十一）年三月に横浜を出帆する。世界一周の旅に出るのだ。その成果は、朝日新聞紙上に「漫画・世界一周」として連載され、のち単行本化され人気を博した（清水勲・湯本豪一作成「岡本一平年譜」『一平全集』第20巻所収　一九九一　大空社　による）。

一平の旅行期間は二二年の三月から七月。「漫画・世界一周」の新聞連載が四月から一二月。宮尾しげをの「漫画太郎」の『東京毎夕新聞』への連載は、同年一〇月一六日から翌年の四月六日である。全45回のこの絵物語は、そうした動きに呼応するように、34回目から海外への武者修行へと旅立っている。

この絵物語には、読者の投書欄が設けられていた点もすでにふれた。その詳細はやはり『子ども漫画の巨人たち』（三一書房）にゆずるが、海外遠征という点について、子どもの投書が載せられ、それに応じて太郎も海外にでかけることになったという経緯については、特記しておかなくてはならない。読者である子どもの欲求を紙面に反映したわけだが、読者がそれを求めたのも、また作者である宮尾が即座に対応したのも、岡本一平の世界一周の影響と考えるのが自然だろう。

このように「漫画太郎」は、子ども向けの絵物語でありながら、当時の旅行熱、あるいはいまだ庶民には夢物語であった海外旅行への夢想を、忍術（奇術）試合の対抗という形で実現させていた

のである。

◆奇術と忍術

石井のいう「遍歴もの」は、現代でも大衆文化の物語の基本構造となっている。ストーリー・マンガも例にもれない。「ドラゴンボール」「バガボンド」「鋼の錬金術師」その他、同様のパターンをふむマンガは数多い。絵本でもそうで瀬田貞二が遍歴もののうち元の場所に帰り着く物語を「ゆきて帰りし物語」と名づけたのはよく知られている。ぼくも一度「お出かけ絵本」の名のもとに、その視点構造について調べたことがある。ともあれ「漫画太郎」では、仙台、江戸、そのあと欧米という旅の経路が、忍術使いという古典的な設定とはうらはらである点がシュールだった。

もうひとつこの絵物語のきわだった要素は、忍術使い、あるいは対戦相手が奇術師たちいう設定であるだろう。忍術使いは当時の尾上松之助の忍術映画、あるいは明治末から刊行された少年向けの読み講談である立川文庫の直接的影響だが、奇術師の登場はいったい何を意味するのだろう。

おそらく大正という大衆娯楽が一般化する時代相に結びついているのだと思う。と同時に、その背景には（深読みは避けた方がいいのかも知れないが）、今日からみればオカルティックな思想や宗教の動きが横たわっていたと言えるのかもしれない。ここらあたりは蛇足としてお読みいただきたい。

大正期は交通網が整備され、通信の整備、機械化される世の中の動きと背中合わせにオカルト、ないしは精神運動、それを世俗化した形での健康ブームが訪れていた。古来の武術も大衆的な形をとり出す。

福来友吉博士が念写実験に没頭、帝国大学を追われるのが大正二年のこと。大正末の催眠術の流行も、連動した動きに受け取れる。

武術も今日へ受け継がれる流れを生み出す。古武術の師武田惣角による大東流は、大正に入って植芝盛平や嘉納治五郎に受け継がれ独自に発展。合気道や柔道に発展し、今日にまで影響を与えている。

健康法としての呼吸法も盛んで、岡田虎二郎、藤田霊斎、肥田春充などの指導者が排出。中国にまで影響を与え気功の一種としての静座を広めた。

図8 ⑤「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」S3

図9 ⑥『漫画太郎』S8

宗教も例外ではない。出口王仁三郎が大本教の本部を綾部に建設したのが大正八年。その影響は谷口雅春の成長の家や、いくつかの宗教団体に多大の影響を与え今日にまで及んでいる。

そこに倉田百蔵の「出家とその弟子」のブームや、エマーソン、ベルグソンなどの思想の流行も加えれば、大正という時代のおもしろさが見えてくる。

要するに機械文明が進行する一方で、精神的な遺産の再編運動が民衆に起こっていたわけで、同時にそれは、第一次大戦後の好景気と半ば以降の不況の落差に起因していたはずなのだ。

ともかく「漫画太郎」が素材とするの奇術、あるいは忍術合戦は、時代のそうした動きを横目に見ていたのかもしれない。

◆欧米を舞台とした「漫画太郎」

最後に描き変えのあとの作品、⑤と⑥の作品について簡単にふれておこう。

①の新聞連載、あるいは単行本化された②「漫画太郎」なる絵物語は、のち「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」（一九二八年六月　『現代漫画大

観4　子供漫画』所収　中央美術社）として再生することとなった。先に⑤として記した描き変えの作品である。①新聞連載の34～45回分を物語の構成には変更のないものの、大幅な描き直しを行ったのち収録している。また、その五年後には、⑥『漫画太郎』なるタイトルで単行本化（一九三三年一月　春陽堂）されている。この二つの作品についてふれておきたいと思う。

まず⑤には欧米への忍術修行の部分だけが再構成されており、そのためそれなりに首尾一貫した構成の物語となりえている。ただ、物語展開は言葉の量がかなり増え、一ページに2コマ掲載という紙面構成をとったため、絵が大判化したぶん冗漫な印象になってしまっている。

タイトルも変わり、主人公の名が「漫画太郎」から「忍曽太郎助」と変化している。おそらく元の作品のイメージを払拭するためなのだろう。その代わり絵の構図に関しては、より映画的な意識に立ち大胆なものが増えている。〈図10〉〈図11〉にそうした例をあげておいた。宮尾しげをがなみなみならぬ画面意識をもつ絵物語作家であったことを、こうした図像は示している。

⑥は、『漫画太郎』なるタイトルで、そのまた数年後に単行本化（一九三三年一月　春陽堂）されたものだ。同社の「少年文庫」のシリーズのひとつで、そのほとんどが読物であるにもかかわらず、麻生豊の「ドンボシャ君」「ノンキナトウサン」とともに収録されている。それだけ宮尾しげをという絵物語の存在が特別であったということだろう。⑥の単行本において「漫画太郎」は、1～48ページまでを占めている。あとは同じ作者の「猿飛佐助漫遊記」「ぼん珍さんの旅」が収録さ

図10、11

⑤「花競異国忍術仕合・忍曽太郎助」より

れている。

おもしろいことに、⑥「漫画太郎」の内容は、①『東京毎夕新聞』やそれをもとに書き直した単行本②に準じているのではなく、タイトルを異にした⑤とまったく同じなのである。書き直しのあともない。欧米の忍術修行だけを分離した⑤を、絵の描き変えもなしにそのままに収録しているのだ。もちろん、主人公の名を「忍曽太郎助」から元の「漫画太郎」に戻したので、文章中には新しい名に変えてはいるのだが、名前以外は文章もまったく変わりがない。これまで何度も描き変えをしている点からすると奇妙でさえある。

⑥の単行本の出版は、一九三三（昭和八）年。満州事変以降軍部の目は海外に向けられ、同時に内には共産党員の弾圧が激しさを増す時期だった。ナショナリズムが声高に叫ばれるわけではなく、欧米の奇術師たちを日本の忍術少年がやっつけるというストーリーは、スーパーヒーローの活躍と海外へのまなざしという文脈で読みとられていたはずだ。時代がもっと下れば、日本少年の欧米での奇術師征伐というストーリーは、ナショナリズムの発露として読み替えられる可能性をもっていたかもしれない。

「漫画太郎」の何度かに渡る描き変えのあとは、以上のとおりである。

大正の旅行ブームを背景に、スーパーヒーローが遍歴物語の構成もとに、縦横無尽の活躍をする「漫画太郎」。純日本的な顔つきの宮尾しげをの絵物語は、絵物語という形式と絵柄の簡略さから、今日ではなかなか評価を受けにくいかもしれないが、子細に検討してみるなら、表現内容ともに大きく時代を先取りした先進性を見せていたのである。何よりもその点を強調して本論を終えたいと思う。

◆奇妙だったのは子どもの訴え。机の下にもぐりこんで待機、そのとき机の上板と触れた指のすきまに緑のオーラが輝いていたとのこと。電磁波によるものなのでしょうか。親としては、そんなことはそっちのけ。目の前のできごとに、どう対応したものかということばかり考えていました。おそらく子どもにとっては、不思議な体験とともに地震が記憶されているはずです。

◆最近は地震予知も話題に。ネット上でも数々の予知システムや実験が載っていて、専門外のぼくとしてもついついそちらに目が行ってしまいます。スマトラ沖地震による津波の被害、新潟地震による建物等の崩壊と、なにやら物騒な気配。次は南海地震だ、東海地震だとマスコミも騒いで、いや、大変な時代にいるのだなと、ついため息をついてしまいます。

◆我が家ではも、地震以降、ポリタンに水を溜めていたはず。非常食もストックしていたのに。でも、結局タンクの水は代えることもせずに、ポリタン自体が劣化。非常食もときおり食べてしまって、いまはカンヅメが数個というありさま。まあ、現実とはこういうものでしょう。喉元すぎれば…というやつで。反省することしきりです。

◆ついつい、思いが過去に…。いけない、もっと前向きに生きねば。いまに目をむけなければ…。と、思いなおしてこれから来る春のことを考えると、これまた昨年の30倍の規模という花粉が舞い来るという季節。さらに憂鬱な気分に落ち込みました。トホホ…。

◆地震はない、花粉は飛ばない、火事起きない。さらには、強盗いない、詐欺師絶滅、悪徳政治家死に絶え、核兵器消滅。ついでに甘いもの食べ放題。そんな世の中が実際こないものでしょうか（マンガのなかならホント簡単なんですが…）。

◆――『ビランジ』は、無料の冊子です。どなたにでもお送りしています。ただし、郵送料として、一冊につき二四〇円分の切手が必要です。バックナンバーの紹介ページで、在庫の有無をご確認下さい。

また、『ビランジ』では原稿を募集しています。400字で四〇枚以内、ページ数で20枚以内。版下作成が原則です。締め切りは、05年の7月末。採否は竹内の判断によります。その点をご了承下さい。

それでは、また16号でお会いしましょう。

ビランジ 15号
発行者＝竹内オサム（〒　　）
発行年月日＝2005年4月3日
印刷＝ヤスダアーツ株式会社